

壮春 力歩

東大寺にマッチする8体の小建築物

会長 鈴木 末一

建築や環境デザインなどを専攻

する全国の大学生による「建築学生ワークショップ」が9月20日、東大寺で開かれた。奈良県景観・自然環境課と森林整備課から当会に素材提供など支援要請があり、景観グループと里山グループが対応した。

このワークショップは、学生がキャンパスを離れて開催地に滞在し、地域の特殊性を課題に体験学習する。今回は全国の大学工学部建築学科の25名が8班に分かれて参加。国内外で活躍する建築家の指導と建築エンジニアリングの合宿指導を受け、東大寺の景観にマッチする新鮮で小さな建築物8体を制作、展示した。

地域協力型の公開プレゼンテーション(情報伝達手段)として、NPO法人が2001年から続けてきた。2010年度の第10回は平城遷都1300年祭事業として開かれ、考古遺跡として日本初の世界文化遺産に指定された平城宮跡が会場に選ばれた。2016年は、公開直前のキトラ古墳と国営飛鳥歴史公園の開演イベントとして古墳の麓に小さな建築物8体が実現。2018年は伊勢神宮、2019年は出雲大社、今年「建築の聖地」と呼ばれる東大寺大仏殿での開催となった。

8つの班のうち第3班と第8班の建築素材は竹だった。9月10日、景観グループは「ならやま」を訪れた学生5名に竹の切り出しを指導。設計図に沿う寸法に小間切りした150本余りの竹を大仏殿まで運んだ。また、第3班が作品に使った植生は、森林整備課の依頼で、展示後、「ならやま」で育てることになった。

当会にご縁のできた3つの班のうち、まず第3班。お水取りの「お松明」や「炎」からヒントを得た「灯(ともしび)」。割竹を使った作品で、二月堂境内に展示した。

第8班のタイトルは「ユレウゴクモノ」。東

大寺・大梵鐘前の広場に展示。当初の構想は、煩惱を自覚する意味を込めて108個の石材を吊るす企画だった。事前の会合で講師から「一番メインの鐘の音をなんとかしたいという発想はとても面白い。どう向き合うか、もっと深く考えたら」との助言を得て、グループで協議を重ねた結果、当初と大幅に発想を転換。「ユレウゴクモノ」のコンセプトとして、1200年以上も毎日鳴ってきた鐘の音。それを、今を生きる竹筒でどう共鳴させるか考えた。竹筒を鐘の撞く位置を向くようにひねりを加えて重ね、それを合掌するようにもたれ合わせて造形した。三つのそれぞれの層は、鐘の音の周波数に合わせた長さにした。リーダーの佐伯君は「異なる筒に耳を当てれば、異なる音色が聞こえます。変化する音を愉しんでもらえたら」と熱く語った。天平の鐘の音と令和の100本の竹がどう共鳴したのだろうか。



第6班は、生命の誕生を思わせる植物の種から形を構想。板状の端材の隙間に植生を植えた。人間だけでなく多くの生き物とも繋がる建築物とし、「繋一植物か建築かー」のタイトルで講堂跡に展示した。植生が展示後「ならやま」で育つことになり、メンバーたちは、「環境の繋がりや植物のサイクルに注目したので、苗木が奈良の地に根付くのは大変うれしい」とにっこり。



当会の創立20周年記念モニュメントの制作に、会員「1万2千歳の知恵」に加え、学生諸君の斬新なアイデアを拝借したいものだ。

註:「一万二千歳の知恵」=昨年8月、朝日新聞『天声人語』が当会を紹介し「会員170人に年齢を掛ければ、知恵と経験は延べ一万二千歳を超す」と評した。